ふた夜

バラーデ

身は、なごりなくつかれたり。胸の中は、ある安からぬ思ひみちみちて、さながら、かきむしらるる様に、苦しさたへがたし。その苦しさや、我を追ふ。こき灰色の気みちて、しめしめと心地わろき広野を、ひたゆきに行く。

いかなれば、かくは苦しき。何の不安ぞ。のがる道やいづこ。たちまちいづこともなく、あたりの灰色の気の中に、ひびきひびくものの音、――嗚呼ショパンがバラーデ――この世のものとも覚えぬ、美しき調。夢心地にきき入るに、半にして、はたときえぬ。

不安のおもひ、いよいよたへがたく、ひびきのきえたる方やいづくと、身をかへして追はんとするに、わが足なへて、しりへにたふれぬ。灰色の気、いやが上にかさなりて、我を圧すに、寂莫としてきこゆる物の音もなし。

かくてしばし、もの音ふたたびおこりぬ。――同じくショパンがバラーデ――されど、こたびは、嗚呼、きくにたへぬしらべよ。たとへば清かるべきましみづの、かきにごされて、みだされて、よどみよどみゆく苦しさか。おもひしる、これやがて、わがはかなきしらべぞ。苦しきかな。そのひびき、わが胸のただ中を射る。

きけきけ、このききぐるしさを。これぞ、夜あけなば、人々のまへに、汝がひくしらべ。とほき昔の作者おこして、とふまでもなし。日頃みちびきたまふ師に、何の面かある。いかにかろき罪とかおもふ。やめよやめよ、といふに似たり。さなりさなり、何とかいはん、わが罪はかろからじ、いかにかせんとおもふに、師のほほゑみたまふさま、かげの様に、目にぞうかぶ。心よわきものよ、ただつとめよ、わが命ぞ、と、きのふかいひたまひしを、さながらなり、ゆるしたまへ、ゆるしたまへ、つとめたりとて、つとめたりとて。……ああ、わが身よ、このままこの灰色の気と共に散じゆけ。さらば、夜あくとも、

きえてあとなき身ぞ。会や何、しらべや何と思ふ時、すざましき不協音、わが耳をつらぬく。

目をあぐるに、まぼろしなごりなくきえて、ピアノの上にうつぶしたりし耳のほとり、架の上なりしバラーデの譜は、タステンをすべりて、床におちたり。

左右の蝋燭には燭涙ながくしたたりて。

帰り路

谷中なる母君のもとよりのかへさ、くらうなりたる杉の下道、少しおそろしき心地するを、はたはたと小さき足音われをおひ来、物おぢする心に、おひたてらるる様に思ひて、いそぎゆく、うしろなる足音もいそぎ来て、遂に何ものかわが袖にすがりぬ。おそろし、と思ふほどなく、十二三なる男の子なるをしりぬ。心少しおちゐて、つくづくと見るに、物乞とおぼし、やれたる衣、あらはなる足、そも何をか求むる、ととふに大路までともなひたまへ、といふ。いづこにかかへる、と問ふに、かへるにはあらず、ゆくなり。今日も、人たちよりもの恵まれしが、こよひは、久々にて、屋根ある処にいねん、と思へば、これよりゆかんとすなり。あまりくらければ、道やまよはむ、ともなひたまへ。その様、おのがむさきを、人のいとふとは、かけても思ひしらぬさま也。あはれなる子、親やなき、家やなき、いかにしてさはなりし、きかせよ、といふに、親とは何ぞ、ととふ。さらばひとりか、いかにして日々すごすぞ、と、さらにとふに、ここかしこさまよひて、ものめぐまるれば食ひ、めぐまれねば食はぬ折もあり、いぬるにも処さだめず、人の軒下などにても事たりなん。さらばわれも少しのものをあたへんかといふに、否々、今日は町にゆきて、もの食ひ、猶いづこにかやどるを得ん、今日のはこれにてたれり、といふ。さらば明日の代ともなせかし。明日のは又何かせん、今日のみと思ふや。されど、人は、いつも好みてものあたふるものならねば、さる折のそなへとなすべきならずや、といふに、あやしげなるおももちして、あたへじと思ふ人より、しひて得んとは願はず。さ

る折は食はぬのみなるを、といふ。しひていふに、されども、手にとりぬ。

さまざまかたりつつゆくほど、かかるたぐひのものに似げなく、すぐなるこころもちたり、とおぼゆ。おのがすくせをうらめしとも思はで、みちたらひたるやうなるそのさま、あはれ人となりても、そのこころうしなふなと、つくづく思ふに、わが身かへり見らるる心地して、胸いたき事かぎりなし。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社
平成二十一(2009)年十月十五日発行
初出：「心の花」第十卷第十二號
明治三十九(1906)年
筆名：橘糸重子
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年四月十九日

橘糸重【散文作品集】に戻る。